

二〇二三年度入学試験問題 (第一回)

国語 (五十分)

【注意】

- 一 この試験の問題文・設問は、1ページから16ページに印刷されています。
- 二 解答は、すべて別の「解答用紙」に記入しなさい。
- 三 文字は、正しくきちんと書きなさい。
- 四 、。」「はそれぞれ一字と考えなさい。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

思いだす。五年前の春。二度目の告白。

小六の椎太。小六の私。異性に身がまえばはじめる年ごろにあつて、私たちはまだまだ無邪気なほうだったと思う。

小三、小四とクラスがはなれていた椎太のことを、当時の私はまださほど

X

見つけていたわけではなかつ

た。小一でめばえた淡い恋心をあためつつ、ときどきほかの男子に目移りをしたり、体育の先生にあげられたり、アイドルと結婚してふたごを産む将来計画をヒグチに語ってきかせたりしていた。

思えば、あのころの「好き」は、ネギとメンマだけのラーメンみたいなものだった。後味さっぱり醤油味。

やみつきになるどろどろのスープも、脂こつてりのチャーシューも、胃にのしかかる煮卵もない。

澄んだスープの中を漂っていた私は、小一のときの失恋さえも、

Y

遠いむかしの話として処理してい

た。とうに治ったみみずばれみたいなもの。だからこそ、小五でふたたび椎太とおなじクラスになったとき、「楽しい二年間になりそう!」といとも軽やかに浮かれることが

できたのだ。

ところが、実際に新学期がはじまると、五年一組は思ったほど楽しいクラスではなかった。担任が点数主義のAIロボットみたいな人だったこと、クラスメイトの多くが塾や習い事に通いだして忙しくなったこと、世話好きのまとめ役がいなかったこと——いろんな要素が相まって、五年一組を和気藹々から遠ざけた。だれもがグループの輪に閉じこもり、おなじ顔ぶれとだけ交わって、必要以上のコミュニケーションを厭う日々。

そのグループからあぶれてしまった中村くんという男子がいた。

極度におとなしかった中村くんは、ほかの子に話しかけることも話しかけられることもなく、いつも一人でぼつんといた。勉強はよくできるやせっぽつちの男の子だった。クラスメイトたちは人畜無害な彼を攻撃しないかわり、いてもいなくてもいい存在として冷たく黙殺した。椎太以外

は。

「中村、宿題やった?」

「中村、『ジャンプ』の今週号、読んだ?」

「中村、寝ぐせついてんぞ」

活気のない五年一組で唯一元気をもてあましていた椎太は、自分の視界に元気のない子が存在することに耐えられなかったのかもしれない。毎日のように声をかけては、ひとりぼっちの沼から中村くんをひっぱりだそうとした。男子たちからしらけた目を向けられても、当の中村くんからめぼしい反応がなくても、めげずに「中村」「中村」と呼びかけつづけた。それは同情や正義感ではなく、弱きを守る野性の反射神経のようなものだったのではないかと思う。

同時に、五年一組のさめた空気とも椎太は戦っていた。本人がそれを自覚していたかはともかくとして。

「椎太って、強いね。流されないんだね」

ある日、私らしみじみつぶやくと、椎太はへんな顔をした。

「流されるって、どこに」

「どこって……そういう話じゃなくて」

「じゃ、どういう話だよ」

「流されないって話」

「だから、どこに流されないのかわかるように言え！」

少年・椎太とは会話が成立しないことも多かったけれど

ど、流されがちな自分にはできないことをやってのける彼に私は改めて惹かれ、恋のスープは多少複雑な風味もまじえてぐつぐつ煮つまりだしたのだった。

一方で、椎太のがんばりもむなしく、中村くんはしだいに学校を休みがちになった。季節が移ろうほどに欠席は増え、中村くんのいない教室があたりまえの光景となって、ついに、クラス替えもなく持ちあがりて六年一組になった春、担任のロボが皆に告げた。

「中村くんはリースクールへ通うことになりました」

浅い驚きが教室に広がる中、とつさに私は窓ぎわの席にいた椎太をふりむいた。

中村くんは学校をやめたのか。なぜやめたのか。いったいどこのリースクールへ行くのか。椎太ならばロボを質問せぬにすればずだ。

が、椎太はそうしなかった。教室のざわめきをこぼむように、彼は感情を押し殺した顔で窓の外をながめていた。

その日一日、あきらかに口数が少なく、あきらかに笑顔が弱々しく、あきらかに給食を食べるのがいつもより遅かった（おかわりもしなかった）椎太が気になってたまらず、放課後、私はこっそり彼を尾行した。椎太は中村くん

に会いに行くんじゃないか。そんな読みもあった。

ところが、予想に反して、椎太の足は中村くんの家へは向かわなかった。かといって自宅へ向かうでもなく、ぶらぶら川沿いを歩いたり、意味もなく商店街をぬけたり、見るからに「まっすぐ家に帰りたくない人の歩き方」で町をうろつきつづけた。つねに前だけを見ている椎太の目が、距離を置いてつけていく私をとらえることはなかった。

ひたすら前進を続けた椎太がようやく止まったのは、町外れのお寺に足を踏み入れてからだ。椎太は何も祈らずに本堂を通りすぎ、奥の母屋を通りすぎ、さらに奥にある庭園の池の前で静止した。

バレーコートの手面くらいはありそうな池。その縁石の前に立ち、椎太が水をのぞきこむ。それっきり、電池が切れたように動かない。

何やってるんだらう？

夕暮れの空の下、椎太の影は池を護る地蔵のごとく留まりつづけ、私はものかげから彼を見ているのいいかげん飽きてきた。

そこで、たまたまそこを通りかかったふりをして、声をかけることにした。

「あれー、椎太？ やだ、ぐうぜん。こんなところで何してるの」

見え見えの小芝居だ。が、椎太は私の言葉を疑わず、ふりむきさまに答えた。

「鯉がいる」

「ふうん」

鯉なんてべつにめずらしくない。そう思いながらも並んで一緒にのぞくと、想像以上にたくさんいた。抹茶色に濁った水の中、光沢のある赤や白の鯉が、うろこをきらきらひらめかせながら泳いでいる。

「ほんとだ、けっこういるね。ここ、初詣でよく来るけど、ぜんぜん気がつかなかった」

やけに静かな椎太に言うと、ぼそとした声が返ってきた。

「鯉のぼりは？」

「え」

「鯉のぼりは気がついたか？」

「初詣で？」

「そうじゃなくて、今日」

会話が成立しない。私は頭の整理をしてからふたたび口

を開いた。

「ええつと、今日、鯉のぼりを見たかってこと？ このお寺で？」

「そ。住職さんちの玄関先にあつたやつ」

「ううん、気がつかかなかつたけど」

椎太の背中しか見ていなかった、とは言えなかつた。

「あつたんだ、鯉のぼり。わりとでかいやつ。それ見たあとでこつちに来たら、本物の鯉がいて、びっくりした。

で、俺、なんか考えちゃつてさ……」

椎太の声が曇る。とちゆうで言いよどむなんて椎太らしくない。

「何を考えたの？」

「鯉のぼりって、本物の鯉が見たら、どう思うんだろうなって」

「本物の鯉が……鯉のぼりを見たら？」

「俺、鯉の気持ちになつたら、なんかどんよりしちゃつた」

スニーカーのつま先で池の縁石を軽くけりながら、椎太は冴えない表情で続けた。

「だつてさ、自分たちをぶよぶよにふくらましたみたいな

やつが、糸にくくられて、竿にくつつけられて、空でひらひらしてんだぜ。鯉にしてみりゃ悪夢じゃん。人間ヴァージョンの鯉のぼりとかあつたらこわくない？」

椎太の言う人間ヴァージョンを頭に描き、私は深々うなずいた。

「ん。たしかにホラーだね」

「だろ。しかも、お父さんとお母さんと子どもたちと、家族で見せもんにされてんだぜ。人間ってひどいことするよなあ。俺、鯉の気分になって、人間社会にむかついた。なにか『屋根より高い鯉のぼり』だよ。屋根より高く上げんなよ」

椎太は鯉の立場から本気で人間社会に憤っているらしく、縁石をける足が徐々に力を増していく。それに反応するように、池の中から赤い尾がはねあがり、こまかい水しぶきを宙に散らした。鯉の世界にも元気のいいのがいるみたいだ。

「でもさ、人間もそうだけど、鯉だつていろいろなんじゃないのかな」

冷たくなつてきた風に吹かれながら水の波紋をながめていたら、ふとそんな言葉が口をついて出た。

「中にはさ、小さな池で生きるより、空を飛びたい鯉だっているかもしれないよ」

「空？」

「うん。池の鯉より、空飛ぶ鯉になりたい鯉。そんな鯉が鯉のぼりを見たら、意外と、わくわくするかもよ。あそこに夢をかなえた鯉がいる、って」

そんなわけないか。言っただしから恥はずかしくなっただ、ふと横を見ると、縁石をける足が止まっていた。

「そっか」

「え」

「なるほど、そう考えればいいんだ」

力強くうなづく椎太の顔からは、さっきまでの翳かげりがころっと消えている。

「だよな、^Dどうせだつたらポジティブな鯉の気分になっただろうが、うん、それ採用。俺もこれからそう思うことにする。夢をかなえた鯉……つまりアレだ、鯉のぼりは鯉たちの自由の女神なわけだ」

悪夢から自由の女神へ。いともスピーディーな転換てんかんにあっけにとられる私の横で、椎太は「うん、うん」とご満まん悦えつの笑顔でうなずきつづけている。

^E頭の切り替えが速い男の子。一秒先にはちがうところにいる。いつも私は置いていかれる。だからこそ、まぶしい。

紅くれないいろ色の夕焼けをかぶった椎太に見とれていた私は、

「中村も、ちっこい世界から飛びだして、自由になったのかもな」

椎太の口からふいに飛びだした名前に、はたとわれに返った。

中村くん。そうだ、椎太の浮かない顔には鯉以外の理由もあつたのだ。

「中村くんのこと、椎太はいいの？ このままで」

息をひそめて表情をうかがうと、椎太は一瞬いっしゆんだけ瞳ひとみをこぼらせた。

「ま、ちよつとくやしいし、さびしいけど、でも、中村がいいならいいよ」

「ほんとに？」

「ん。フリースクールってどんなところかよく知らないけど、フリーってからは自由なんだろ。中村が今までより自由になって、楽になるなら、そっちのほうがいいよ。むしろして通いたくない学校に通うことないし」

「そっか……ん、そうかもね」

椎太はそんなことを考えながらあの長い道のりを歩いてきたのか。そう思ったら胸がぎゅつとして、私はことさらに声を張った。

「そうだね。みんながおなじ公立学校に行かなきゃいけないわけじゃないもんね」

「そう、そう。道はいろいろあっていいよ」

「うん。なんか、学校にいと、ここだけがすべてって思っちゃうけど」

「学校なんて池だよ、池。中村は海にくりだしたんだ。あいつ、意外と冒険家だったんだ」

私たちは妙に意気投合し、世界は広いという話でもりあがっていったのだけれど、そうした話題とはまたべつの

次元で、私はひそかにじんとしていた。椎太と会話が成立している！

椎太と言葉が噛み合った。歯車が合った。心と心がつながった——そう、その一方的な一体感私を屋根より高く舞いあがらせ、ぐいぐいとひとつの方向へ導いていった。今なら私の思いが椎太に届くんじゃないか。告白するなら会話が成立している今しかないんじゃないか。お寺の神様も応援してくれるんじゃないか。そうだ、今だ！

(森絵都「ヒカリノタネ」による)

【注】

*ヒグチ——私の親友。

*厭う——いやがる。

問一 空欄 にあてはまることばを、次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア つゆも イ ねちっこく ウ もはや

問二 ——線部A「それは同情や正義感ではなく、弱きを守る野性の反射神経のようなものだったのではないかと思う」とあるが、椎太の中村くんに対する気持ちとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分がこんなに元気なので、同じクラスの中に元気のない人がいることが信じられないでいる。

イ グループからあぶれてしまった中村くんを一人ぼっちにするのは、自分のプライドが許せないでいる。

ウ 中村くんの存在を黙殺しているクラスメイトに、中村くんを一人にさせないよう故意に見せつけている。

エ やせっぽちで一人でいる中村くんがとても弱く見えるので、守ってあげることが当然だと思っている。

問三 ——線部B「少年・椎太とは会話が成立しない」とあるが、私と椎太は「流される」の意味をそれぞれどうとらえているのか。説明しなさい。

問四 ——線部C「椎太の背中しか見ていなかった、とは言えなかった」とあるが、なぜ私は「言えなかった」のか。理由を説明しなさい。

問五 — 線部D「どうせだったらポジティブな鯉の気分になったほうがいいよな」とあるが、ポジティブな鯉の気分になると、椎太は中村くんのことをどう考えられるようになるのか。椎太の考えとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 中村くんが人畜無害のままフリースクールに行けて良かったと考えられるようになる。
- イ 中村くんはフリースクールに行くことで、自由になったのだと考えられるようになる。
- ウ 中村くんは夢をかなえてみんなより先にフリースクールに通うのだと考えられるようになる。
- エ 中村くんがいいと思ってフリースクールに行くのだから、さみしくないと考えられるようになる。

問六 — 線部E「頭の切り替えが速い男の子。一秒先にはちがうところにいる。いつも私は置いていかれる。だからこそ、まぶしい」とあるが、椎太のことをまぶしく感じるのはなぜか。理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア すぐに前向きに考えられる椎太は、暗いことしか考えられない私を明るく照らしてくれる人だから。
- イ もとの考えにこだわらず、新たな発想にすばやくたどりつける椎太は、私にとってあこがれの人だから。
- ウ 私のことなど気にかけずに次の場所へ進んでいく椎太は、競争心に火をつけ、私を高めてくれる人だから。
- エ 今よりも素晴らしい世界をまたたく間に想像し、他人を幸せにできる椎太は、私にとって異次元の人だから。

問七 — 線部F「そう思ったなら胸がぎゅっとして、私はことさらに声を張った」とあるが、私の「胸がぎゅっとし」た理由を説明しなさい。

問八 — 線部 G 「私はひそかにじんとしていた。椎太と会話が成立している！」とあるが、椎太と会話が成立することがな
ぜ「じんと」するのか。これまでの私と椎太の会話をふまえて七十五字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

A

言葉は風景のようなものだ。いや、山や野に咲く生きた花^{はな}島^{ぼたけ}のような気もする。種子は同じでも、時と場所によって、咲かせる花はちがう。

たとえば今、東京・新宿には高層ビルが林立して、まるで未来都市のように見える。戦後、新宿駅西口がまだ闇市^{やみいち}の時代に、私は、フランス文学科の学生だったが、詩を書く^かこうとして駅前マーケットの間をほつつき歩いていたら、今日の街の風景を見ると、まったく隔世^{かくせい}の感がある。

本当にバラック建築^たつづきのごった煮^にの街で、混乱をきわめていたが、しかし一種の活気があった。戦争の暗い時代から解放されたということで、文学や芸術には、自由が沸騰^{ふつとう}していた。しかし、アメリカ軍の占領^{せんりょう}下にあつて、言葉には米語スラング^スが氾濫^{はんらん}していた。

そうした混乱の一時期ののち、朝鮮戦争^{ちようせんせん}を境に、また、だんだん世の中が静まり、しだいに日本の社会も姿を整えていった。

かくて今や、新宿の空を見上げれば、忽然^{こつぜん}として夢のような東京都庁をはじめ超^{ちゆう}高層ビルが立ちならび、ビルの

谷間を、朝晩通勤の人々の列が埋^うめている。まことに、夢か現^{うつ}かという思いがする。

その間に私たちの日本語も変わった。これは当然のことだ。世の中が変わり都市ができれば、文明の、こうした風景が出現する。人間の生活も変わる。ビル街ができれば歩き方も違^{ちが}ってくるし、ファッションも変わるといふものだろう。人間の生活が変われば言葉も変わる。当然話し方も違^{ちが}ってくる。人それぞれの考え方も、環境^{かんきやう}によつて変わっていくことであろう。

このごろ、日本語が乱れている、敬語が目茶苦茶だ、外来語のカタカナが多すぎる、若者の変な造語がさっぱりわからない、日本語はこの先どうなるんだと、よく話題になる。たしかにそういう気がしないでもない。だが、本当にそうだろうか。

ここで、正しい言葉とは一体何だろうと、もう一度考えてみる必要がある。もし正しい言葉というものが、一つだけはっきり定まっているのであれば、たしかに、皆^{みんな}がそれだけを使えば用は足りることになる。

たとえば水を飲みたいということを言いたいとき、意味が伝わりさえすればいいのであれば、「水が飲みたい」と

いう言い方が一つあれば充分だ。【1】、現実はどうだろうか。そんな簡単なものではない。

人間の生活や心は限りなく豊かだ。そこで言葉にもひねりをかけようとする。「ああ、水が飲みてえな」とか「喉がからっからだ」とか、なぜか一本調子の言い方から外してみたくなる。

とくに、若者は言葉の冒険をすることで自己主張をしたり、目立ちたがる。また、自分たちの遊び心や、グループの仲間意識などを満足させようとする。

若者ばかりでない。職人さんなども、自分たちの職業の特色を表わすために、言葉にひねりをかけることがままある。

正しい言葉というものは、たしかにあるはずだ。しかし、実際に生活のなかで言葉が活きているのは、ひねりをかけて、そこからちょっと外した姿である。だから、逆に活きている言葉は、正しい言葉の外側にあるともいえる。

その造ったおもしろい言葉、ひねった言葉、隠語などが活きているということは、逆にいうと、ひねっているというところを、皆が意識しているわけだ。【2】、正しい言葉のあり方を、じつは知っているということになる。

したがって、私は日本語の行く末について、それほど心配していない。いろいろと若者が造語する。ハイティーンやローティーンが携帯電話やメールでカチャカチャやっている。それはやはり言葉遊びをして、言葉の感覚を磨いている、あるいは自分の個性を主張しているのだともいえる。

しかし、逆にいえば、正しい言い方というものが意識されていながら、それができるわけだ。それがなければ、言葉は通じなくなってしまう。

だから、活きている言語、ビビッドな生の言葉というのは、遠心力と求心力がはたらいている。その両端の間を揺れ動いている。緊張感で人にアピールしているわけがある。

しかし、現実にはたとえば「人から何かしてもらったら、『ありがとう』と言うこと」という具合に、言葉をとんなる機能、道具として使うという風潮のほうが強い。とくに戦後の話し方教育は、「ありがたい」という言葉一つを取り上げて、言葉の世界をたいへん貧しくしてしまった。

サービス業においては、言葉までマニュアル化が進んでいる。

現代は、管理社会というか組織化された社会である。そのため、言語も、より機能的な面が要求されているのは確かである。

【3】、航空パイロットの言葉は、みな英語だ。全世界の空で、英語らしきものでやり取りされている。しかし、これはもはや本来の英語とは別の、国際航空語とも言わなければならない。操縦に必要なこと、それだけを正確に伝えていけばよいのである。ことは乗客の命にかかわる。

X な、 Y のある、インターナショナルな新しい航空地球語というようなのが、出来上がっている。

また、ビジネスや、国際間の取引の言葉にしても、何ともあれ国際化した言葉で、万国共通のお金のやりとりをしてもうけたい。そのための機能をすみやかに果たしたいという世間の要求は、最近たしかに強くなっている。

その点で日本語は、とりわけニュアンスの深い言葉だから、不都合が多い。そこで、なおのこと機能化の要求が強

くなってきた。

ただし、じつは日本語はやさしい、語順とか文法が面白いなだけ^{*}フレキシブルだから、会話は楽だという話もある。

ともあれ、すべての言葉が会社の受付電話のように機能化・マニュアル化されて、それだけが正しい言葉だというのは、いかにもさびしい。会社やビジネスで訓練された言葉を身につけても、家に帰ると、夫婦間の会話も子どもとの会話もできないということも、いずれ起こってくる。

たしかに、簡単に役に立つという言語の機能を軽視することはできないが、^Eそればかりに重きを置く今日の風潮は、日本人の言葉を貧しくしている。いや、生活の内容さえ貧困にしかねないのである。

こうした、近頃の風潮は、私には、何やら言葉というものを、たんに意味を右から左へ^{うんぱん}運搬するための道具としか考えていないように思われる。しかし、それはビジネスという、ごく限られた一部の分野でのみ有効な考え方であって、人間生活全体に当てはめるべきものではない。

だからこそ、もっと全体の場というものの、人間の生活や、コミュニケーションというものを掘り下げ、言葉を一つの文

化全体の中に位置づけるといふことだわりを持つ必要がある。

(栗田勇『日本文化のキーワード』による)

【注】

*闇市——公で認められていない取引をするお店が並ぶ市場。

*隔世の感——変化、進歩が速く、時代が急に移り変わったと感じること。

*バラック——粗末そまつな建築の仮小屋。

*スラング——特定の社会や階層でのみ使われる言葉。

*氾濫——あふれるほどに出回っていること。

*忽然と——たちまち。

*ハイティーン——十代後半の若者。

*ローティーン——十代前半の少年少女。

*ビビッド——鮮明せんめいなさま。

*ニュアンス——言葉ではうまくあらわせない気持ちなどの細かな意味。

*フレキシブル——柔軟じゅうなんなさま。

問一——線部A「言葉は風景のようなものだ。いや、山や野に咲く生きた花晶のような気もする。種子は同じでも、時と場所によって、咲かせる花はちがう」と同じ内容を表している一文を、『』の中から十七字で書き抜きぬきなさい。

問二【1】【3】にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　しかし　　イ　たとえば　　ウ　つまり

問三 — 線部 B 「私は日本語の行く末について、それほど心配していない」とあるが、筆者がそのように考える理由を説明しなさい。

問四 — 線部 C 「活きている言語、ビビッドな生の言葉というのは、遠心力と求心力がはたらいている」とあるが、「遠心力と求心力がはたらいている」とは、どういうことか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 造った言葉が、正しい言葉なのか、正しくない言葉なのかの判断がつかないこと。

イ ひねった言葉をおもしろいと思う人たちと、それを否定する人たちが現れること。

ウ 正しい言葉から外そうとする意識と、正しい言葉を守ろうとする意識が同時にあること。

エ 正しい言葉を使ったり、使わなかったりすることで、会話の相手とのあいだに緊張感を生むこと。

問五 — 線部 D 「とくに戦後の話し方教育は、「ありがたい」という言葉一つを取り上げても、言葉の世界をたいへん貧しくしてしまった」とあるが、「言葉の世界をたいへん貧しくしてしまった」とはどういうことか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 言葉を単なる道具と考えるようになり、日本人がカタカナ語ばかりを使うようになったこと。

イ 言葉の使い方を決めることで、その使い方が通用する集団の中でしか言葉が使えなくなったこと。

ウ 豊かであるはずの人間の生活や心が言葉に反映されず、皆が同じように言葉を使うようになったこと。

エ 若者たちのひねった言葉が、正しくない言葉とみなされ、使えなくなってしまう言葉が増えたこと。

問六 空欄 、 にあてはまることばとしてふさわしいものを、次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- X 「ア 一石二鳥 イ 奇想天外 ウ 公明正大 エ 単純明快」
Y 「ア 柔軟性 イ 中毒性 ウ 有効性 エ 流動性」

問七 ——線部E「そればかりに重きを置く今日の風潮は、日本人の言葉を貧しくしている。いや、生活の内容さえ貧困にしないのである」とあるが、どうしてそのように言えるのか。文章全体をふまえて説明しなさい。

三

次の①～⑤の——線部のカタカナを漢字にしない。

- ① 震災しんざいからフツコウした。
- ② 外国の会社とボウエキする。
- ③ 歴史館のテンジを担当する。
- ④ 温かい紅茶にサトウを入れる
- ⑤ 午前中の用事を計画的にします。

